

中国における婚姻と家族の研究

張 琢 著
星 明 訳

〔訳者まえがき〕

ここに訳出した張琢の「中国における婚姻と家族の研究」は、かれが自著『中国社会和社会学百年史』（1992 年，中華書局〈香港〉）に新たに加筆した部分である⁽¹⁾。加筆前に扱われた時期は，康有為が広州で長興学舎を創立し，その教学計画に「群学」⁽²⁾の名前のあった 1891 年から，同書が擱筆された 1991 年までの 100 年間である。したがって，1992 年以降の中国社会の未曾有の変化および中国の社会学のその後の進展については論じられていない。それらを新たに書き下ろしたのがこの訳文である（この書き下ろされた部は，今回の訳文以外に「中国の社会変動に関する社会学的研究」，「社会階層の分化」，「學術文化の復興」，「社会建設」，「經濟建設」，「人口学と人口社会学」などがある）。

この訳文では，1980 年から 2013 年ごろまでを中心に社会学のみならず政治学，経済学，法律学，歴史学，民族学，人類学などの領域から婚姻と家族にアプローチされた研究が整理され，解説され，そして分析されている。

1. 婚姻と家族の研究の四つの発展段階

婚姻と家族は人類の繁栄を維持する基本的な紐帯である。それぞれの民族，それぞれの国家の婚姻と家族の制度はその政治，経済，文化の状態の集結した反映であり，それゆえ，婚姻と家族に関する研究は社会学の領域に限られているだけでなく，政治学，経済学，法律学，歴史学，民族学，人類学などの諸学科にも関わっている。

過去の百年余りを総合的にみると，中国の婚姻と家族に関する研究はおおよそ始動，退潮，中断，復興と繁栄の 4 段階を経過してきた。

第 1 段階は 20 世紀はじめから 1940 年代までで，近代の社会科学の視点で中国の婚姻と家族に対して研究が行なわれたはじまりと初歩的発展の時期であり，社会の変遷を重視する西洋の歴史学の思想および社会調査を重視する西洋の社会学，民族学，人類学の方法の導入はこの

時期の研究理論と研究方法の更新を促進した。婚姻史、家族史、宗族制度、農村家族、都市家族、出産制度、法律と婚姻家族の関係などの研究がこの時期の研究の主要テーマであり、出版された著作だけでも数十部に達する。代表的な著作には『中国古代婚姻史』（陳顧遠，1925）、『中国婦女生活史』（陳東原，1928）、『中国宗族制度小史』（呂思勉，1929）、『北京郊外之鄉村家庭』（李景漢，1927）、『五百一十五農村家庭之研究』（李景漢，1931）、『広州工人家庭之研究』（徐啓中，1934）、『婚姻與家族』（婚姻と家族）（陶希聖，1934）、『中国家族社会之演变』（中国の家族社会の進化）（高達観，1934）、『農村家庭調査』（言心哲，1935）、『中国婚姻史』（陳顧遠，1937）、『現代中国家族問題』（孫本文，1942）、『生育制度』（費孝通，1947）、『中国法律與中国社会』（瞿同祖，1947）、『明清兩代嘉興的旺族』（明・清代の嘉興の名家）（潘光旦，1947）などがある。

第2段階は1950年代から1960年代中期までで、婚姻・家族の研究は沈滞期に陥った。その社会的背景は、つまり①1952年にソ連モデルを模倣して、社会学をブルジョア階級のための偽科学だとみなして廃止したこと、②1957年の「反右派運動」の展開で、非常に多くの学者が間違われて「右派」にされてしまい、やむを得ず研究活動を中断せざるを得なかったこと、③「階級闘争をかなめとする」という国を治める方針の確定が、社会科学研究の独立性と科学性に重大な影響を及ぼしたことである。それでも、この期間、歴史学の方法からの研究成果がなお少しある。主要な論著は『古代中国的十進制氏族組織』（張政娘，1951年）、『試論西周春秋間的宗法制度和貴族組織』（楊寬，1956）、『論宗法制度』（金景芳，1956）、『婚姻和家庭在歷史上的演变』（婚姻と家族の歴史的進化）（馬起，1956）、『關於宗族，部族的商榷』（宗族，部族をめぐる論議）（賀昌群，1956）、『論宗法制與封建制的關係』（童書業，1957）、『甲骨文所見氏族及其制度』（丁山，1956）、『論殷代親族制度』（李学勤，1957）、『北朝胡婚論考』（姚薇元，1958）、『論鄉族勢力對於中国封建社会經濟的干涉』（郷族勢力の中国封建社会經濟への影響を論ず）（傅衣凌，1961）、『祠堂，族長，族権的形成及其作用試説』（左雲鵬，1964）などがある。しかし、政治の学術に対する荒々しい妨害は、すでに学者たちが社会科学の方法を運用して、客観的に中国の婚姻家族の歴史と現実を研究することを非常に困難にした。そのために、この時期は研究成果の数が少ないだけでなく、論著の質も1930年代や1940年代より大きく下がった。社会調査の方面では、称賛に値するものは1950年代初めから1964年までに継続して繰り広げられた大規模な「少数民族の社会と歴史調査」で、相前後して1000人を超えるひとが調査に参加して、調査に基づいて整理された文字資料は数1000万字に達し、そのうえ非常に多くの映像資料が撮影され、非常に貴重な資料となっている。そのなかの相当部分は各少数民族の婚姻と家族の状況に関する内容であり、後日の少数民族の婚姻と家族の研究のために強固な基礎を築いた。

第3段階は1960年代中期から1970年代末までで、研究の中断の時期である。1966年にはじまった「文化大革命」は、中国の政治および経済の混乱をもたらしただけでなく、婚姻と

家族の研究を含む人文・社会科学研究の停滞も招いた。

第 4 段階は 1979 年から現在までで、経済改革、政治改革およびこれに伴う思想解放運動が中国経済の急激な発展と社会生活の活気をもたらして、社会科学研究の復興と繁栄を促進した。この時期は婚姻と家族に関する調査研究および理論と方法のすべてに著しい進歩があり、素晴らしい成果を多くあげた。

紙面に限りがあるので、ここではただ 1980 年以後の婚姻と家族の歴史、婚姻観、家族規模と家族構造、家族機能、少数民族の婚姻と家族に関する研究領域のいくつかの主要な成果と論点の大筋を紹介したい。上述の五つの研究領域のなかで、婚姻・家族史研究の主要な対象は先秦から現代までの婚姻と家族の歴史の変遷であり、残りの四つの研究領域の研究対象は現代、とくに 1980 年以後の婚姻と家族の変化と特徴である。

研究方法からみれば、婚姻・家族史研究は歴史文献に対する考証と整理に重点をおいており、現代の婚姻と家族の状況に関する研究は実地調査および各種のデータ資料に基づいた定量分析を重視している。

2. 婚姻と家族の歴史的研究

婚姻と家族の通史研究の面で、代表的な著作には『中国古代婚姻與家庭』(史鳳儀, 1987), 『中国家長制家庭制度史』(王玉波, 1989), 『中国婚姻家庭的嬗变』(中国の婚姻家族の変遷)(張樹棟, 李秀領, 1990), 『中国的家與国』(岳慶平, 1990), 『中国婚姻史稿』(陳鵬, 1990), 『中国家族制度史』(徐揚傑, 1992), 『中国家庭的起源與演变』(中国の家族の起源と進化)(王玉波, 1992), 『中国宗族社会』(馮爾康等, 1994), 『中国宗族制度新探』(『中国の宗族制度に関する新たな考察』)(錢杭, 1994), 『中国婚姻家庭制度史』(陶毅, 1994), 『中国古代的宗族和祠堂』(馮爾康, 1996), 『宗族志』(常建華, 1998), 『中国的家法族規』(費成康, 1998), 『中国婚姻家庭史』(祝瑞開, 1999), 『中国婚姻史』(王玢玲, 2001), 『中国婚姻立法史』(張希坡, 2004), 『中国家庭史』5 卷(張国剛等, 2007), 『中国宗族史』(馮爾康等, 2009) などがある。

そのなかで、陳鵬の『中国婚姻史稿』は内容が詳細で、法律の色彩が濃厚で、引用史料が豊富であるという三つのはっきりした特徴をもっている。全書は 13 章に分かれて、順を追って総論、婚姻の形態(上, 下), 婚礼(上, 下), 订婚(婚約)(上, 下), 結婚(上, 中, 下), 離婚, 妾, 入り婿, 子供嫁(息子の嫁にするために幼い時からもらったり買ったりして育てた女の子), 周朝から清朝まで数千年間の婚姻制度の変遷が詳しく論述されている。古代中国では、婚姻関係は伝統の礼式と民俗の影響を受ける以外に、さらに国家の法律や法令の厳格な管理を受けた。この本は婚約, 結婚, 離婚, 妾, 入り婿などの部分で、過去の各朝代の法令制度を基礎にして、法律の角度から詳細な考証と論述を行なった。内容は婚礼の主宰者と媒酌人の

責任、婚約の要件、婚約の身分上および刑法上の効力、婚約解除の法定理由、各朝代の法定結婚年齢、各朝代の同姓不婚・親族不婚・良民と賤民との不婚・妻帯者の不婚に関する法令、結婚の法定制限、結婚の法的効力、夫婦間の権利と義務、夫婦の財産関係、離婚の法定理由、離婚の法定手続き、離婚の法的効力、妾や入り婿および子供嫁の法的地位などの多くの問題を含んでいる。全書の題材は經典や歴史関係書および各朝代の礼式と律令を主として、そのうえ大量の裁判書類、事例、諸子の論著、個人の筆記、詩、雜劇、民俗資料を旁証として、先秦時代から清代までの 570 余りの書籍・資料を引用している。

王玉波は『中国国家父長制家庭制度史』と『中国家庭的起源與演變』のなかで、中国の古代家族形態の変遷について以下のように整理している。氏族社会の時期、家族は幼年時期にあり、母系家族→両系家族→父系家族の変遷過程を経た。夏朝・商朝時期に至って、小家族は大家族に頼り（「小家族」とは居住を共にする親族集団のことで、「大家族」とは男性たる家父長を中心にして形成される親族集団のことである）、大家族は宗族（女系を排除した共同祖先から分かれる男系血族のすべてを指す）に頼っていて、厳格な宗法制度の支配下にあり、直系と傍系、長幼、貴賤が厳格に区分され、小家族はまだ独立の地位を得ていなかった。春秋時期、宗法制度（宗族を規制する礼制）が次第に緩まるのに従って、小家族は宗族のなかから漸次独立した。戦国から前漢初期、小家族が主導的地位を占めるようになった。この家族の特徴は規模が小さく、家長は家族の支配者で、父子関係が家族関係の核心で、妻は家族生活のなかで重要な地位をもっていることである。前漢後期、家父長制の小家族制度は、次第に家父長制の大家族制度に転換し、そのため後漢から五代（唐朝以後中原に興亡した後梁・後唐・後晋・後漢・後周の五朝、紀元 907-960 年）まで、規模が大きく、親族が多い大家族（横方向からみて）と累代同居する大家族（縦方向からみて）が相当普遍的に存在し、家族の形態は新たな特徴を呈した。

徐揚傑の『中国家族制度史』は、古代の家族形態を「原始社会末期の家父長制家族」、「殷周時期の宗法式家族」、「魏晋から唐代へ至たる名門大家族式家族」、「宋以後の近代封建家族組織」の 4 種類に区分し、大量の史料を駆使して、原始社会の末期以後の中国の家族制度の変遷の歴史を詳しく論述した。この本の特徴は、異なった歴史的時期の家族の全体的形態を巨視的に把握することに重点をおいていることであり、それぞれの歴史的時期の政治状況や経済発展の状況と密接に関連させて家族制度を解釈し、伝統的な家族制度の中国の歴史の発展と社会生活に対する逆機能を強調している。

馮爾康らの共著『中国宗族社会』は、時系列で、中国の伝統的宗族の形態を五つの発展段階に区分している。すなわち①秦以前の典型的な宗族制時代、②秦朝から唐朝に至る名門（士族）宗族制時代、③宋、元時期の大官僚宗族制時代、④明、清の地方の名士や富裕者の宗族制時代、⑤近現代の宗族の変化時代である。そのうえで婚姻、姓氏、墳墓、祠堂、族譜、族田（宋代以降あらわれた義莊、祭田等同族的土地所有）などの具体的制度から着手して、宗族の

形態の特徴、等級の構造、社会的機能などの問題を分析した。著者は中国の宗族制の発展には三つの特徴、すなわち第 1 は、秦以前から近代までで、宗族制度は一貫して社会の政治、経済、文化および人びとの日常生活に影響を及ぼしてきたが、しかしその影響力は次第に弱まった、第 2 は、貴族を基本的な成員とする集団から平民を主体とする組織へ次第に変化して、組織の管理者も次第に社会上層の人物から読書人や平民へ変化し、宗族の民衆化が宗族自体を発展させて、継続的な生命力をもつ社会団体になった、第 3 に、近代まで、政治的機能が一貫して宗族の基本的機能の一つであり、近代以後になると、その政治的機能の効果は次第に低下して、もともとの副次的な社会的機能が強まって主要な地位を占めるようになった、という特徴を指摘している。

銭杭は『中国宗族制度新探』のなかで、漢人の宗族の範疇、宗族の規模、宗法制度、宗譜(同族の系図)、宗族の祖廟と祠堂、現代化と漢人の宗族との関係の分析をとおして、宗族から派生してきた歴史感、帰属感、道德感そして責任感という 4 種類の心理的欲求が漢族の宗族が存続する根本的な要因であると指摘している。

張国剛編の 5 巻からなる『中国家庭史』は、いままでの中国の家族史研究を集大成にしている。第 1 巻の『先秦から南北朝時期まで』は、春秋戦国時代の社会の激変が家族の変革に与える重大な影響および中国の伝統的家族倫理体系の形成過程を探求している。第 2 巻の『隋唐五代時期』は、隋、唐および五代時期の家族規模、家族構造、婚姻状況、女性、家族関係、家計、分家と財産分割、家庭教育などの問題を探求している。第 3 巻の『宋遼金元時期』は、宋、遼、金、元時期の家族形態、家族の経済生活、女性と結婚・出産、家族関係などの内容を論述している。第 4 巻の『明清時期』は、明朝と清朝の家族の倫理関係、親族付き合い、こどもの養育と教育、家族の娯楽および疾病対策などを考察している。第 5 巻の『民国時期』は、農村家族と都市家族の就業状況、収入、支出水準そして消費構造についての考察をとおして、都市と農村の差異と階層の差異を明らかにしている。

時代ごとに分けられた中国の婚姻家族史の研究成果はさらに多く、商・周から清代まで、それぞれの時代の婚姻家族にすべて研究の専門書が出版されている。代表的な著作には『商周家族形態研究』(朱鳳瀚, 1990), 『周代家庭形態』(謝維揚, 1990), 『先秦政治婚姻史』(崔明德, 2004), 『漢代婚姻形態』(彭衛, 1988), 『漢代的家庭與家族』(岳慶平, 1997), 『東晋南北朝家族文化史論叢』(王永平, 2010), 『五～十世紀敦煌的家庭與家族關係』(楊際平ら, 1997), 『唐朝婦女』(高世瑜, 1988), 『唐朝婦女地位研究』(塔麗, 2000), 『宋代婚姻與社会』(張邦煒, 1989), 『宋代宗族與宗族制度研究』(王善軍, 2000), 『元代社会婚姻形態』(王曉清, 2005), 『明代宗族研究』(常建華, 2005), 『明清福建家族組織與社会變遷』(鄭振滿, 2009), 『十八世紀中国婚姻家族』(王躍生, 2000), 『清代宗族法研究』(朱勇, 1987), 『清朝中期婚姻衝突透析』(清朝中期の婚姻衝突に関する分析)(王躍生, 2003), 『倫理與生活—清代的婚姻生活』(郭松義, 2000) などがある。それ以外に、1980 年から 2013 年まで、時代ご

とに区分された研究論文は数百編に達し、婚姻・家族問題の各方面にまで論及している。

3. 婚姻観の変化

婚姻観、すなわち人びとの婚姻に対する見方は、主としてどのように婚姻の意義を解釈するか、婚姻の成約は誰によって決定されるか、配偶者選択の規準などの反映である。人びとの婚姻観の形成は歴史的に形成された婚姻の習俗の影響を受けるだけでなく、また社会の変遷にもなって変化する。

一般的にいえば、婚姻は男女両性の結びつきであり、同時に生物的性格と社会的性格も持っている。生物的性格とは男女が一定の年齢に達し、生理的、心理的な成熟に伴って、性的要求がはじまることを指す。婚姻関係の確立は人類が自身の性的要求を満足させるために規範化したモデルを提供した。社会的性格とは婚姻は一種の社会的行為であり、三つの内容を含んでいることを指す。第一に社会構成の基本的単位は家族であり、家族の形成、親族間の社会関係の形成と拡大はすべて婚姻がもととなっていること、第二に婚姻関係は人口の再生産を実現する前提であり、安定した婚姻関係は人口の安定した発展を保障する重要な条件であること、第三に婚姻は法律あるいは社会的習俗によって認められた両性間の結合であり、いったん婚姻関係が確立すれば、ただちに法律、規則、習俗、宗教信仰などによって男女双方の権利と義務が規定され、同時に子孫には合法的地位および財産相続権などが提供されることである。

中国の歴史からみると、伝統社会では、婚姻は一種の社会的行為であることが強調されて、婚姻の生物的性格は社会的性格に従属し、後者は前者に対して制約的役割を果たすべきだと考えられている。現代の社会では、婚姻に関する観点がさまざまであり、一部の学者は伝統的観点を継承して婚姻の社会性を強調しているし、また別の一部の学者は婚姻は個人的行為であり、個人の自由の領域に属し、社会はあまりに多く干渉すべきではないと考えている。

伝統的な中国人は、婚姻のもっとも重要な目的は男性側の家族のために跡継ぎを生むことであり、その次の目的は両家が婚姻によって親戚となることをとおして、男女双方の家族の勢力を拡大することだと考えている。儒家の経典『礼記』のなかの昏（婚）義では、このような婚姻観を次のように権威性のある総括を行なった。すなわち、「婚礼はまさに二姓の好みを合わせ、上はもって宗廟につかえて、下はもって後世に継がんとするなり。ゆえに君子はこれを重んず」⁽³⁾と。秦による全国統一以前から清末までの歴代の政府は、このような婚姻観について法律という形で広く宣伝、保護をしていたために伝統的な婚姻の主要な特徴、すなわち父母が取り決めた結婚、男尊女卑、個人は結婚する自由も離婚する自由もないというという特徴を形づくった。その影響は 20 世紀に至るまで一貫して続いた。

20 世紀は中国の社会革命と婚姻革命が同時に実行された時代であり、婚姻の自由の主張は都市から田舎へ広がり、そして新中国成立後は法律で定着させた。1950 年 5 月 1 日に公布・

実施された『中華人民共和国婚姻法』は、父母が取り決めた結婚の強制、男尊女卑、子女の利益を無視した封建的な婚姻制度を廃止して、男女の婚姻の自由、一夫一妻、男女の権利平等などを実行し、女性と子女の合法的な利益を保護する新民主主義の婚姻制度を実行することを宣言した。かつ「男女双方の本人の完全な自由意志」が結婚登記のための必須要件として規定された。これと同時に、全国すみずみまで婚姻法の大規模な宣伝・貫徹運動を展開して、中国人の婚姻観念の変革を促した。

1982 年、中国社会科学院社会学研究所によって主管された北京、天津、上海、南京、成都の 5 大都市の 4,385 世帯、5,057 名の既婚女性に対して行なわれた調査は、1949 年以前に結婚した女性のうち、婚姻に至るプロセスが「父母が取り決めた結婚」がもっとも多くて、その次が「親戚の紹介」で、第 3 位は「友達の紹介」で、第 4 位の「自分で知り合った」は被調査者のたった 10% を占めるに過ぎないことを明らかにした。1949 年以後、「父母が取り決めた結婚」は急激に減少して、1966 年以後ほとんど根絶した。1966 年から 1976 年までに結婚した女性のなかでは、「友達の紹介」が第 1 位 (46.65%) で、「自分で知り合った」は第 2 位 (34.59%)、「親戚の紹介」は第 3 位 (18.35%) であり、「父母が取り決めた結婚」はわずかに 0.51% を占めるに過ぎない。同じ「親戚の紹介」といっても、1949 年以前と 1949 年以後の性質には違いがある。1949 年以前、「親戚の紹介」によって結ばれた婚姻のなかで両親は非常に大きな決定権があった。1949 年以後の「親戚の紹介」はただ男女双方を引き合わせる橋渡しの役割をするだけであり、婚姻の決定権は基本的に婚姻の当事者が握っている (劉英など、1987 年)。1980 年代以後、「親戚の紹介」によって結ばれた婚姻は都市でさらに減少して、2000 年以後に結ばれた婚姻のうち、約 60% が「自分で知り合った」で、約 40% が「同僚、友達の紹介」とおしてで、「親戚の紹介」とおした婚姻は無視できるくらい少なくなった (風笑天、2012)。

生産様式、交際条件そして文化的環境の違いによって、農村の人びとの婚姻観の変化は明らかに都市の住民より緩慢である。中国社会科学院人口研究所が 1991 年に 10 の省・直轄市で 1500 組の夫婦を対象に実施した「現代中国の女性の地位」の調査は、都市では「自分で知り合った」と「友達の紹介」がすでに夫婦の知り合う主要なスタイルになっており、ただ 16% の夫婦だけが「親戚の紹介」とおして知り合ったことをみいだした。これに対して、農村の夫婦のなかでは、半数が「親戚の紹介」とおして知り合っており、「友達の紹介」とおして知り合った夫婦が約 3 分の 1 を占め、「自分で知り合って」恋愛で結婚したのはただ 15% に過ぎない。この調査は、農村住民の結婚の自由度は都市の住民より低く、農村女性の結婚の自由度は農村の男性より低いことを示している。「初婚の決定のスタイル」からみると、「自主的に決定する」と回答したのは都市の男性 95.54%、都市の女性 94.64%、農村の男性 78.97%、農村の女性 70.88% であり、「両親が決定し、本人が同意する」と回答したのは都市の男性 3.56%、都市の女性 4.76%、農村の男性 20.16%、農村の女性 27.68% である (沙吉才な

ど、1995）。

ある学者は1980年代に至っても、経済が立ち後れて、交通が不便で、文化の閉鎖的な一部の農村では、父母が取り決めた結婚が依然として主導的地位を占めていると指摘している。その父母が取り決める結婚の具体的なやり方は、①子供婚約であること、つまり子女はまだ幼い時期に両親によって婚約を決められるのである。②換親・転親であること、すなわち換親とは娘をある家の息子に嫁がせ、代わりにその家の娘を自分の家の息子の嫁として娶ることである。両家の得る利益はそれぞれ等しくなる、互いが一人を嫁に行かせ、一人を嫁に娶るから、損得がなく、費用も少なくすむ。この形が数家族の間の換親に及ぶことを転親という。換親・転親の婚姻の年齢からみると、その多くは男性側が女性側より年上で、差の大きなものでは20数歳という大きな年齢差もある。当事者自身の条件からみると、一般には男性側が比較的劣っており、身体や知能や精神になんらかの病気ないし障がいをもっているばあいもある。換親、転親で利益を得るのはすべて息子で、犠牲となるのはすべて娘の方である。娘の利益ために換親、転親の列に連なる両親はいないのである。③女性を嫁がせることを利用して高額の結納の金品を請求すること。息子が成長すれば両親の財産を受け継ぎ、そして親を養う責任を引き受け、娘が成長すると他姓のひとの嫁となり、両親を養う責任を引き受けないやり方は農村地区では普通の習俗であるため、多くの両親は苦勞して大きく育てあげた娘をむざむざ他のひとに与えることができず、娘を嫁がせる時、男性側の家族に結納の金品を扶養費の埋め合わせとして取りたてることは至極あたりまえのことと思っている。④嫁を買うこと。すなわち人身売買人から息子が妻をめとるために、女子を買うことである。女性を商品として売買するという違法犯罪問題は、1949年以後一度姿をひそめていたが、しかし1980年代の末から、多くの農村地区で女性を売買する現象があらわれ、再び深刻な社会問題になった。外部社会からの情報の欠如、若いひと、とくに若い女性の経済的な従属性および教育レベルの低さは、父母が取り決めた結婚がこれらの地区で存続している社会的経済的な土台となっている（張萍、1993）。

1990年以後、全国を席卷した「民工潮」は数億の農民を農村から都市へ移動させて、結婚・恋愛期にある若い男女にとって非常に大きな収穫があった。都市に行き工業や建設業に携わることはかれらに経済的独立を獲得させ、異性との交際のチャンネルを拡大させただけではなく、両親や農村の伝統的な習俗の束縛からも抜けださせた。自由恋愛や自ら婚姻を決めることが、今日ではすでに都市に行き工業や建設業に携わる青年の主流になった。とくに、出稼ぎの若い女性は経済的に独立して、過去のような息子の結婚ために娘の利益を犠牲にすることをいとわない両親が取り決めた婚姻はすっかり跡を絶った。

中国人の婚姻観は、さらに配偶者選択の基準、すなわち男女が結婚相手を選択する基準にも具体的にあらわれている。「自分で知り合う」か、それとも「ひとによる紹介」あるいは「両親が取り決めた」かに関わらず、人びとの配偶者選択にはすべて基準がある。この基準の形成

は、第一に生活環境と教育レベルの影響を受けている。人びとの成長環境は異なるし、受けた教育レベルも異なっているので、配偶者選択を形成する基準も同じではない。次に、配偶者選択の基準の形成はまた社会的価値と風俗習慣のきわめて強い影響もを受けている。したがって、ある時期とある区域内において、これらのそれぞれ異なる配偶者選択の基準はしばしばある方面で共通の傾向性をあらわして、時代の特徴と地域の特徴を帯びている。学者たちの研究は、現代の中国人の配偶者選択の基準は以下のいくつかの特徴があることを明らかにした。

第 1 に、男女の配偶者選択の基準には明らかな相違があること。男性は社会的地位がほぼ同じか、あるいは自分より低い女性を選ぶ傾向があり、容貌が美しく、なごやかで気立てがやさしい、家事の上手な女性を配偶者として好む。女性は配偶者の容貌、身長、性格などの方面に対しても一定の要求があるが、しかしいっそう学歴、職業階層そして収入が自分より高い男性を配偶者として求める傾向がある。伝統的な「男は才人、女は美人」あるいは「男は金持ち、女は美人」という配偶者選択の基準は今日の社会のなかで依然として主導的な役割を果している（張萍, 1995）。

第 2 に、政治と経済の変化が配偶者選択の基準の具体的な内容の変化に影響を及ぼすこと。ある学者は 1949 年以後の中国の社会発展を 1949 年から 1978 年、1978 年から 1990 年代初期、1990 年代中期から現在までの 3 段階に区分して、それぞれの段階の配偶者選択の基準に対して分析を行ない、次のように指摘している。第 1 段階の中国は高度に政治化した社会であり、個人および家族の政治的地位が配偶者選択の重要な基準となっている。第 2 段階は改革開放の初期であり、「文化復興」の時代で、知識人の地位が上昇して、学歴が男女の若者、とくに若い女性が配偶者選択をする重要な基準となった。第 3 段階は経済が高度成長し、社会の貧富の分化が拡大した時期であり、相手の家族および個人の金銭的条件、財産獲得の能力が若い男女、とくに女性が配偶者選択をする重要な基準となった（王英俠, 徐曉軍, 2011）。

第 3 に、階層内婚制が続いていること。いわゆる階層内婚制とは、配偶者選択の過程で、人びとは基本的に同一の階級あるいは階層のなかで配偶者を選択する慣行を指す。中国の伝統的な農業社会の階層内婚制は、典型的な「縁組をする男女双方の家柄・財産がつり合っていること」としてあらわれている。両親の願望に従い、仲人の紹介によって、家柄・身分がつり合った婚姻の按配が、当時かなり普遍的な配偶者選択のモデルであった。1949 年以後、公有制の確立にしたがって、一度、財産の多寡によって生まれた階級差はなくなったが、しかし職業階層、教育レベルおよび戸籍制度などに基づいて新しく生まれた階層的地位のランキングが、人びとの婚姻の選択に引き続き影響している。どのような家族の出自であるか、あるいは両親の社会的地位の高低が、子女の婚姻の選択に対して決定的な作用を及ぼしている。圧倒的多数のひとの婚姻の対象は、すべて自らが所属する階層あるいは自らが所属する階層クラスに近い階層である（張翼, 2003）。

上述したように、現代の中国人の婚姻観の変化は中国の政治、経済、文化の変革の大きな影

響を受けており、急激な変化の一面があると同時に、伝統的な慣習を継続する一面もある。いままでのところ、大多数のひとつにとって、婚姻はまだ純粋な愛情に基づく自由な選択だということができない。若い世代の婚姻のなかで、愛情という要素はとても大きい比重を占めているが、しかしまた社会の習俗、政治上の利益、経済上の利益などの各種の要素の制約を受けており、ロマンチックな愛情はともすればそれほど婚姻を取り交わす唯一の動機ではない。

4. 家族規模と家族構造

家族規模とは主として家族の人口数の特徴を指し、家族構造とは家族構成の状況を指す。全体的に中国の家族規模と家族構造の特徴およびその変化の規則性をとらえようとすれば、必ず定量分析をしなくてはならない。研究のなかで、学者たちが根拠にする主要な資料には古代の典籍、20世紀以来の各種の社会調査データおよび全国国勢調査の資料がある。

歴史上、中国の家族規模はどれくらいの大きさであったのか。20世紀の前半期、社会学界の論争の焦点の一つになったことがある。中国の古代の典籍のなかには「大家族」に関する多くの記録があることによって、1930年代に、ある学者は歴史上の中国人の大部分は「累代同居の人口の多い大家族」のなかで生活してきたと考えている（陳長衡，1935）。これに対して、費孝通は実地調査のデータを用いて次のように指摘している。このような大家族は決して中国の社会構造の普遍的な様式ではなくて、各農村地区の1戸当たりの平均人口は4人から6人までである（費孝通，1947）。梁方仲は二十五史、歴代の政府の書類（歴代政書）およびいくつか地方誌のなかの統計資料の整理と考証をとおして、費孝通と大差がない結論を得た。かれは、中国の1戸当たりの平均人口は、西暦2年（前漢）は4.87人、609年（隋朝）は5.17人、705年（唐朝）は6.03人、1291年（元朝）は4.46人、1602年（明朝）は5.61人、1911年（清朝）は5.17人と考えている（梁方仲，1980）。

1980年以後、歴史上のそれぞれの時期の家族規模に関する研究はさらに詳しくなり、学者たちの比較的一致した見方は「累代同居の人口の多い大家族」は少数に過ぎず、「5人家族」が中国の伝統的家族の基本的な規模とすることである。その根拠は次の3点である。第1は、中国の伝統社会は農業を基礎として、かつまた農業は個人の小規模の生産の基礎のうえに成り立つので、これにもっとも適した経済単位は小家族であること。第2に、観念のうえからみると、累代同居の家財共有の大家族は一種の理想的な家族モデルであるが、しかし現実のなかでは、家長のコントロールのもとで数組の既婚息子の家族が同居する大家族では、家族間のトラブルが比較的多く、節約意識が欠如するため、したがって、両親が生きている時に分家を行なうことが一般的な慣習であること。第3に、児童の死亡率が高かったことである（蒋文迪，2003）。

1953年以来実施されてきた6回の全国国勢調査は、全面的、動態的に中国の家族規模をと

らえるためにより客観的、系統的なデータを提供した。これまでの国勢調査のデータが示している家族規模は次のとおりである。すなわち、1953 年は 4.33 人、1964 年は 4.43 人、1982 年は 4.41 人、1990 年は 3.96 人、2000 年は 3.44 人、2010 年は 3.10 人である。ここから、家族規模は 1953 年から 1982 年間までほとんど変化はないが、1982 年以後にさらに縮小しつつあることがわかる。出生率の低下、住宅条件の改善、結婚後に親と別居する若夫婦だけの世帯の増加などが家族規模の縮小の主要な要因である。

家族規模の縮小と家族構造の変化は密接に関連している。王躍生は中国の家族を「核家族」、「直系家族」、「複合家族」、「単身世帯」、「不完全家族」、「その他」の六つの類型に分けている。そのなかの「核家族」は夫婦二人からなる家族、夫婦と未婚の子女からなる家族、夫婦の一方と未婚の子女からなる家族を含んでいる。「直系家族」は夫婦あるいは夫婦の一方と一組の既婚の子女および孫からなる家族を指す。「複合家族」は夫婦あるいは夫婦の一方と二組以上の既婚の子女からなる家族である。「不完全家族」は未婚の兄弟姉妹からなる家族を指す。かれは 2010 年の第 6 回国勢調査の 1% サンプルデータを基礎にして、1982 年、1990 年、2000 年の国勢調査の結果と結び付けて、1982 年以後の中国の都市と農村の家族構造の基本的な状態および変動の状況について比較的詳細な数量分析を行なった。かれの分析のなかから、現代中国の家族構造は以下のいくつかの特徴をもつことがわかる。

第 1 に、「核家族」、「直系家族」そして「単身世帯」は中国の家族を構成する三つの基本類型であり、合わせて家族総計の 98% 以上を占めている。

第 2 に、「核家族」の割合は 1982 年の 68.30% から 2000 年の 68.18% へと 20 年間近くほとんど変化がなく、2000 年から 2010 年の 60.89% の下降幅が比較的大きい。その背景には「単身世帯」の増加があり、その割合は 2000 年の 8.57% から 2010 年の 13.67% へと上昇した。

第 3 に、「直系家族」が占める割合は一貫して比較的安定している。1982 年には家族総数の 21.74%、2010 年には 22.99% であり、わずかに増加したに過ぎない。

第 4 に、65 歳以上の高齢者の居住様式からみると、2010 年と 1982 年を比べて、「単身世帯」の割合の変化はあまり大きくなく、およそ高齢者の 12% ぐらいである。この期間に、「夫婦だけ」で構成される高齢者家族は大幅に増加して、都市では 12.77% から 34.27% へ、農村では 13.58% から 26.23% へ上昇した。これと同時にみられるのは、「直系家族」のなかで生活している高齢者の減少であり、都市では 60.07% から 41.45% へ、農村では 59.49% から 50.66% へ下がっている（王躍生、2013）。

5. 家族機能の変化

家族機能とは家族が社会生活のなかで果たす役割を指し、経済、政治、教育、宗教、出産、

養育、親の扶養などのそれぞれの領域を含んでいる。家族機能は社会や経済の条件の変革にしたがって変化する。近年、家族機能に関する研究のなかで、学者たちがもっとも関心を寄せているのは家族の親の扶養機能の変化である。

いわゆる親の扶養とは、一般に成年子女の老いた両親に対する経済的支持、真心のこもった労り（情感慰藉）、そして生活の面倒をみることを指す。費孝通は、親子関係について中国と西洋の文化の違いを比較して、次のように指摘している。両親は子女を扶養する義務がある、これは双方とも同じである。異なっているところは、子女の両親に対する扶養の義務があるか、ないかである。親の扶養は西洋では子女の必須の義務ではないが、中国では子女が当然果たすべき責任である。西洋では、甲の世代が乙の世代を育て、乙の世代が丙の世代を育てる、これは代々順送りに受け継いで次へ送り伝えていくモデルで、「リレーモデル」と略称される。中国では、甲の世代が乙の世代を養育し、乙の世代は甲の世代を扶養し、乙の世代は丙の世代を養育し、丙の世代はまた乙の世代を扶養し、後の世代は先の世代に対して受けた結果や役割を戻さなければならないモデルで、「フィードバックモデル」と略称される（費孝通、1983）。

このような「フィードバックモデル」は中国ですでに数千年続いており、小家族を単位とする小農生産様式、両親の権威と権益を重視する孝道の倫理観念および歴代政府の家族政策が、このモデルが長期に維持することができた重要な要因である。しかし、現代の中国の急速に発展する工業化と都市化、とくに家族規模と家族構造の変化は、このような「フィードバックモデル」を未曾有の挑戦に直面させた。

農村では、伝統的な親の扶養モデルは、まさに二つの面から挑戦を受けている。一つは工業化の挑戦であり、もう一つは若い世代の価値観の変化の挑戦である。

1980年以後、中国の工業化の発展にしたがって、おびたしい農村青壮年が郷里を遠く離れて都市に行き仕事に就いた。このような移動は次第に個人の移動から夫婦がいつしょの移動に拡大して、多くの村は留守番をする老人と児童だけが残ることになった。このような家族構造は家族機能の欠如を招き、同時に高齢者の生活に深刻な影響を与えている。農村で家を守る老親は次のような困難に直面している。①労働負担の加重。出稼ぎ労働者の収入はもとの郷里で農業に従事する収入より高いけれども、しかしかれらの老親に対する経済的支援は往々にしてわずかであり、大部分の高齢者はやはり働くことによって生計を維持しなければならないほどである。とくに、出稼ぎのひとは通常、請負地を両親による耕作に任せており、さらに高齢者の労働負担が重くなっている。②孫の養育負担の過重。さまざまな理由によって、相当多くの農村の児童は出稼ぎの両親と一緒に移動することができず、多くの高齢者は孫たちの日常生活の面倒をみななければならないだけでなく、孫たちのしつけもしなければならず、重い生活のプレッシャーと心理的な負担を担っている。③ある程度他人の補助があれば、自分で身の回りのことができる高齢者、あるいはまったくできないひとに扶養サービスが欠けていること。農

村の医療保障と医療サービスのレベルが長期にわたり都市より低いために、農村の高齢者の罹病率は都市の老人より高い。介護を必要とする高齢者の身の回りにこどもがなく、また家政婦を頼む十分な経済的能力もないので、頼れるのは配偶者だけである。つまり、配偶者のない高齢者は生存困難の苦境に陥ってしまうのである (袁金霞, 2009)。

市場経済の発展と消費文化の普及にともなって、若い世代のなかにあらわれた拝金主義と利己主義の価値観は、農村の家族の養老伝統にさらに大きな衝撃を与えた。具体的にいえば、息子や娘は自分の財産を蓄えるために、結婚の機会に乗じてできるだけ多く家族の財産を分けてもらおうとすると同時に、なんとかして年老いた両親の扶養を拒否しようとする。これによって、農村の家族の世代間関係の緊張と高齢者の生活の困難を招いた。とくに中国の養老保険と医療保険は長い間農村までカバーしていなかったために、働く能力を失った高齢者は経済的にはこどもに頼らざるを得ず、若い世代の孝道観念の希薄さは農村の家族内の親子関係の対立を都市よりさらに先鋭にさせて、伝統的な養老制度の脆弱性を浮びあがらせた (閻雲翔, 2006 年)。

都市では、大多数の高齢者は養老保険と医療保険を享受しており、子女がさらに多く経済的支持を提供する必要がないので、世代間の衝突は農村のように激しくない。都市の高齢者が直面している養老のリスクは真心のこもった労りと日常生活の世話の欠如である。この問題を生み出したもっとも重要な原因は、国家の出産政策がもたらした家族規模と家族構造の変化である。「1 組の夫婦につきこどもを 1 人に制限する」計画出産政策 (一人っ子政策) が 1980 年に実施がはじまり、その主要な適用の対象は都市在住の漢族の住民であった。それ以後に生まれた一人っ子は、現在すでに次々と結婚と出産年齢になって、夫妻いずれも一人っ子からなる家族が「4 人の自分たちの老父母」を扶養する責任を引き受けなければならない。同時に、一人っ子は唯一無二で代替不可能であるため、もし一人っ子が途中で夭折したり、あるいは心身に障がいをもったりすれば、両親は経済的には問題はないけれども、しかし真心のこもった労りと日常生活の世話を受ける基本的な養老の資源をなくしてしまう。さらに、現在職場での競争が日増しに激しくなり、若い世代は自分自身の生計や出世に忙殺されて、両親の真心のこもった労りの欲求を満足させる暇もないし、両親の介護を自らすることもできない。また一部のひとは仕事上の理由によって両親と同じ都市に住むことができないし、両親もまた生活習慣などの理由で、子女と一緒に移動したがいらないため、親子が異なる土地で別々に住む状況になり、年老いた両親は子女から実質的な真心のこもった労りと日常生活の世話を受けることが困難である (石金群, 2013)。

それでは、中国の家族機能のなかの「フィードバックモデル」はすでに西洋の「リレーモデル」に転化したのであろうか。答はノーである。多くの社会調査は、観念のうえからみると、孝道は今日依然として中国社会の主流の価値で、両親に対する親不孝な行為は社会の世論の非難と世人の軽蔑を受けることをあらわしている。具体的な行為からみると、一方では、農村か

都市かを問わず、両親の子女に対する経済的サポート、育児の協力そして家事のサポートは減少しておらず、拡大する傾向さえある。他方では、多数の子女もできる限り真心のこもった労りや経済的支持などの義務を果たして親の恩に報いている。ある学者は、中国の家族内の関係からみると、夫婦平等の程度はすでにますます西洋の家族のようになってきたが、しかし親子関係からみると、こどもの養育と親の扶養との関係は依然として個人主義を基調とする西洋の家族関係と大いに異なると総括している。費孝通が西洋家族の「リレーモデル」と中国家族の「フィードバックモデル」の違いに関する論述はいまま社会の現実には当てはまる（李銀河、2011）。

また、一部の学者は、「フィードバックモデル」の崩壊を防止し、中国の伝統的な養老文化を伝承するためには、政府はそれに相応した政策を制定し、家族を支援する必要があると指摘している。具体的には次の二つの対策を含んでいる。①国民全体をカバーする養老保険、医療保険そして社会養老サービス体系を完全なものにして、子女が両親を扶養する経済負担と世話をする負担を軽減すること、②税の優遇、家族福祉手当、両親介護の休暇制度などをおして、子女が両親を扶養する義務の実行を奨励することである（呉帆、李建民、2012）。

現在、学者たちの上述した提案は、次第に政府の人口高齢化政策に具体化している。

6. 少数民族の婚姻と家族の研究

中国は 56 の民族から構成されている多民族国家であり、少数民族の婚姻習俗と家族の状態は漢族と多くの違いがあるため、研究の焦点になっている。とくに注目に値するのは、少数民族の学者による自民族の婚姻家族の状態に対する調査研究と説明である。

嚴汝嫻編の『中国少数民族婚姻家庭』（1986）は、多くの少数民族の学者の協力で完成した学術著作で、全部で 50 名の執筆者のなかで、少数民族の執筆者は 26 名に及んでいる。この本の内容は、主として 1950 年代までの各少数民族の婚姻家族の伝統的習俗である。1960 年代以後、少数民族地区の政治、経済そして社会構造に非常に大きな変化が起き、それに応じて婚姻家族も多くの新しい要素を取り入れたので、多くの古い習俗は次第に消滅しつつある。したがって、この本の研究は文化を守る緊急措置的な性質をもっている、つまりいくつかの婚姻家族の伝統習俗が消失する前にありのままの記録をできるだけ残そうとしている。同時に、各民族間の相互理解と相互尊重を増進することも、この本の著者たちの一つの目的である。編者は「前書き」のなかで次のように書いている。中国の多くの少数民族の婚姻習俗は明らかに漢族のそれと著しく異なっており、少数民族の間でさえ多種多様である。同時にまた互いに影響し合っている。私たちは、これらの現象が人類の歴史的発展過程に客観的必然性をもって存在するものであると理解さえすれば、差別と偏見を払拭することができ、相互理解と相互尊重によって、民族間の団結と和睦を深めることができる。科学の責任はこれらの社会現象を適切に

紹介し、そして正確に説明して、人びとにその経緯を知らしめて異なる習俗にも理解をもたせ、併せてそれを参考にも啓発にもすることにある。

この本は 1950 年代までの少数民族の婚姻家族の状況について以下のように整理している。圧倒的多数の地区で一夫一妻を主要な婚姻形態にしていると同時に、一部の地区ではまだ集団婚、複婚などの習俗が存在する。

婚姻家族史の起点は現実の生活のなかにはすでに存在せず、ただ伝説のなかにみいだせるだけである。多くの民族の伝説のなかでは、最古の人類と禽獣とは区別がなく、山野で群居して、男女の性生活には制限がないと説いている。その後、兄妹婚－血縁集団婚の時代を経て、次第に血縁・近親の通婚を排除し、さらに母系血族間の結婚をすべて排除する段階に発展して、母系氏族と氏族外婚制を形成した。氏族外婚制も低い段階から高い段階への発展過程を経て、もっとも早いものは氏族集団婚で、その後氏族外の一対婚に発展した。氏族外婚制の原始的な形態は、ある氏族の男子ともう一つの氏族の女子との婚姻で、その後いくつかの氏族間の環状通婚ネットを形成していった。

環状通婚制の本質は、一方向の母方交叉イトコ婚、つまり母方オジの家の娘（従姉妹）は必ず父方オバの家の息子（従兄弟）に嫁がなければならないが、しかし、母方オジの息子はオバの家の娘を妻とすることができないことである。このような一方向の母方交叉イトコ婚は、三つ以上の通婚集団をとおしてはじめて一つの環状通婚ネットを構成することができる。ジンブォ族とトーロン族の婚姻のなかに、このような環状通婚制の遺習をみることができる。

集団婚制のもとでは、結婚するのは集団内部（血縁集団婚）あるいは集団の間（氏族間集団婚）の任意の結合であり、人びとは一定の年齢に達したら、あるいは成人式をあげたら、自然と集団婚生活に引き入れられて、結婚も離婚も格別どうということはなく、おのずと結婚および離婚の儀式をする必要はない。氏族外婚はさらに発展して、一対婚制があらわれた。配偶関係とみなされる同居が社会の風潮として安定した時、集団婚がすでに一対婚へ移行したことを意味する。

雲南省寧滄県永寧区のナシ族とプミ族のなかで盛んに行なわれている「阿注婚」は、女性側の住居への通い婚で、集団婚から一対婚への一種の過渡的形態である。「阿注婚」は出会いも別れも自由で、互いに気に入れば夜をともにし、いかなる儀式もあげる必要はなく、共同生活の家族もつくらない。通い婚に適応した「家族」形態は、純粹に母系による血族構成であり、母系親族あるいは母系家族と称される。しかし、それは婚姻関係を基礎にするのではなく、氏族の分裂の産物である。

一対婚の結婚儀式はもともと非常に手軽であり、結納の金品はもとより、宴席を設ける必要もない。ラフ族の男子が婿入りするばあいは簡単な農具と寝具をもって、家族や友人たちに伴われ女家にはいる。女家はブタを屠り食事でねんごろにもてなして婚礼をすませる。イ族のなかのアシ人は、男子が女子にしたがって野良にでて働くことが二人の婚姻がすでに成立したこ

とを意味する。

結婚の儀式があれば、離婚も一定の手続きを必要とする。離婚手続きはとても簡単であり、一方が一緒にいたくないと思えば、それぞれ自分の道を歩むことができる。たとえばプーラン族のばあいでは、夫が妻に一对の蠟燭を手渡すだけで離婚が成立する地域や、夫婦で蠟燭の端をそれぞれ持ち、夫婦のどちらが蠟燭を刃物で断ち切って半分ずつ持ち去れば、その後は一切かわりなしという地域もある。これらの民族のなかでは、女性と男性は同じく平等の離婚権があって、双方にとって再婚も容易なことであり、社会はこれについて正常な現象とみなす。

一对婚は家族に新しい要素を加える。つまり産みの母以外に、また実の父を確かめなければならぬ。生産力の向上と男性の労働の役割の強化にしたがって、一对婚は一夫一妻制に向う過渡的な条件が次第に熟してきた。小家族は次第に生産と消費を共にする母系氏族から分離して、一つの経済的実体になって、家長も女性から男性に変わった。居住方法は妻方居住から夫方居住に変わり、さらに進んで母系制が父権制に変わった。この変革のなかで、新しくできた父権制と弱まった母系制が繰り返して対決し、対立が婚姻形態の改変をめぐるのはじまったために、少数民族の結婚の習俗のなかに母系制と父権制の衝突をあらわす多くの古い風俗が残った。たとえば、通い婚と嫁入り婚の衝突、掠奪婚と逃婚（望まない結婚から逃れるため、家をでてよそへ逃亡すること）の衝突、妻方居住と夫方居住の衝突、母系血統と父系血統の衝突などである。

父権制の初期には、父権を維持する慣習法と母系制の残した習わしが同時に存在したが、両者はそれぞれ、社会の異なるメンバーに対して機能した。母のもとで生活する未婚青年は、社交はおおびらであり、性生活を享有する自由さえあるが、しかしある点ではすでに慣習法の制約を受ける。つまり私生児は非法なのである、というのもそれは財産の継承などの一連の実際的な問題に関係するからである。妻が産んだ子が確かに夫の子であることを保証するために、多くの民族は既婚女性と他人との不貞を厳禁しており、不貞行為を起こした男女双方に対して厳しい制裁をかし、私生児はさらに災の種とみなされてしばしば生存権を剥奪された。

父権制が母系制に取って代わるにしたがって、女性は過去の崇高な地位を失ってしまい、家族の召使いと夫の子どもを産み育てる道具になった。売買婚、交換婚そして転房婚（レビレート婚：夫の死後、その兄弟と再婚すること）などの婚姻形態も生まれた。

売買婚の多くは結納の形式によってあらわれ、いくつかの民族のなかで結納金は赤裸々に「女の子を買う金」といわれている。これはもともと男性側の家族が、女性側の家族が成年労働力を失うことに対して提供する補償であり、のちに結納金は当事者の家柄、女子の器量と技量などの条件と結び付けられて、一部の民族のなかではかなり大きい額に達して、貧しい男子は一生涯妻をめとることができなくなった。

勞役婚は売買婚の一種の変形であり、同時にまた古い妻方居住の伝統と関係がある。つまり

男子は自身の労働で妻の身売り代金を償うのである。多くの民族では、入り婿は一家の者として扱われない。たとえばチャン（恙）族は、入り婿になった者は「無能な野郎、自らの意志で入り婿になる」といった自らの人格をおとしめる証文を書かなければならず、入り婿の地位の低さを示している。

女性自身は自身の財産権を失うと同時にまた夫の財産になってしまったため、おのずと離婚の権利を失った。反対に、夫は自分の品物を随意に捨てるように、思うままに妻を見捨てることができる。イスラム教を信奉する各民族は、夫が妻に一声「タラク（タラク）」（見捨てるという意味）といいさえすれば、妻は必ず夫の家を離れなければならない。もし夫が口を開かないならば、冷遇された妻は虐待された状態を抜けだすことができない。

複婚制は一夫多妻制と一妻多夫制を含む。一夫多妻制は男子を中心にした複婚制で、すべての民族の上層社会のなかにほとんど存在している、つまり多妻者は主に社会の特別な地位を占める男子である。一妻多夫婚はチベット（藏）族がよく知られており、メンパ（門巴）族、ロッパ（珞巴）族などの民族のなかにも存在している。しかも兄弟が共通の妻をもつだけでなく、友達が共通の妻をもつなどの形態もある。一妻多夫制はチベット族のなかで長く続いているが、その主要な原因は一族の財産である領土と分与地（份地：領主から分け与えられた土地）を分割させないで、一族の社会的地位が下がることを防ぐためである。それゆえに、兄弟共妻現象は領主クラスおよび分与地をもつ差巴クラス（農奴のークラス）のなかで比較的多くみられ、分与地をもたない低い階層のなかでは稀である。

1995 年 5 月から 11 月まで、中国チベット学研究センターの社会経済研究所が実施した「チベットの百戸家族調査」は、はじめて社会学の研究方法をチベットの婚姻家族の状況に対して運用して行なわれた大規模な社会調査である。実際の調査対象は 155 戸の家族で、チベット市街地区、農業地区、放牧地区の三つの異なった類型の地区に及んでいる。調査方法は訪問と観察を主として、同時にアンケート調査と歴史文献の蒐集を合わせたものである。調査内容はチベット族の家族構造、家族機能、家族関係、婚姻観、婚姻状態、生活様式、家族経済、家族の宗教信仰、養老の方法、出産・育児意識などの方面に及んでいる。調査資料の詳細な分析をとおして、この課題チームはチベットの婚姻家族の状況に対して以下のように述べている。

都市化の進展にしたがって、都市住民の婚姻観と家族構造にはすでに大きな変化が起こっているが、しかし人里離れた辺鄙な農業地区と放牧地区では、伝統的な婚姻家族の習俗が依然として社会を支配している。結婚登記からみれば、中国の『婚姻法』の規定によって、結婚当事者が必ず婚姻登記機関で登記手続きをしなければならず、こうして婚姻ははじめて法的効力をもち、法律の保護を受けることができるのである。しかしチベットの伝統的な婚姻の観念のなかでは、結婚は男女の双方の個人的なことであり、伝統的な習俗に基づいて婚礼をあげて双方の家族、所属するコミュニティのメンバーの承認を得さえすれば、すぐさまコミュニティの内

部規範の保護を受けることができる。調査された都市の既婚女性のなかで、登録手続きの未履行者が三分の一を占め、農業地区と放牧地区の既婚女性のなかでは86%以上占めている。

婚姻形態からみると、一夫一妻が主流であるが、同時に一夫多妻と一妻多夫の婚姻も存在している。一夫多妻の形式は、主に姉妹が共通の夫をもつ家族である。一妻多夫の形式は、主に兄弟が共通の妻、友達が共通の妻をもつ家族である。とくに注目すべきことは、1980年代以後、一妻多夫の家族が増加する傾向にあることである。その社会的背景には三つの要因がある。第1は経済的要因である。1980年代にチベット地区は農家請負制を実行して以後、農業区の田地、放牧地区の牧草地および家畜はすべて農牧民に配分した。兄弟共妻は家族の財産分割を避けることができ、そのうえ労働力を農・畜産業の生産に集中でき、自然災害を防ぎ止める家族の能力を高めた。第2は政策の要因である。チベット地区の政策では、チベット族の公務員の複婚を認めておらず、農牧民に対して複婚を呼びかけも、支持もしていないが、しかし禁止もしていない。第3は婚姻法の宣伝が不十分なことである。チベットは土地が広く、交通が不便であるために、婚姻法および婚姻の登録制度は広大な農牧地域に広範にわたって浸透しておらず、多数の民衆はいまなお伝統的な習俗に基づいて結婚している。

1950年から1994年まで、チベットの家族規模と家族構造の変化は、この期間の土地制度の変革とともに進められた政治・経済改革と密接な関連をもっている。そのなかで、1959年の民主改革、1966年の人民公社化運動そして1980年の改革開放は、家族規模と家族構造の変化に対してもっとも大きな影響を与えた。民主改革は以前土地をもたなかった農奴に土地を手に入れさせた。そのうえ自由意志による結婚と生活の改善は家族の分化、つまり分家の増加を加速させ、総戸数が大幅に増加し、家族規模が縮小した。人民公社の時期、土地は集団所有であり、そして統一的な生産と分配が行なわれたために、家族の生産機能を弱めさせて、家族はますます核家族の方向へ進んでいった。改革開放以後、土地と家畜などの主要な生産手段は再び家族経営に戻ったことで、家族の生産機能は回復し、強化することができたとし、家族の規模も再び拡大した（中国チベット学研究センター社会経済研究所、1996）。

2000年以後、異なる民族間の通婚問題が多く of 学者の関心をもつテーマになった。李曉霞は2000年の第5回国勢調査資料の分析をとおして、中国の各民族間の通婚には次のような三つの顕著な特徴があると考えた。

第1に、漢族との通婚は少数民族の民族間の婚姻のなかで重要な位置を占めている。その主要な要因は①漢族の人口はきわめて大きく、全国各地に分布していること、②漢族と各少数民族が一つの地区に混住していること、③漢語が少数民族のなかに広範に普及していること、④漢文化は民族間の婚姻を規制する規定がないことである。現在、漢族とその他の55の少数民族とはすべて通婚関係があり、45の少数民族は漢族との通婚がかれら・かのじよらの民族間の婚姻の第1位を占めている。そのため、民族間の通婚だけからみると、漢族は中国の各民族を結びつけるもっとも重要な紐帯であり、中華民族を結合させる核心である。

第 2 に、一定の地域に集まって居住する民族間の交流は、大規模な民族間の通婚を形成し得る鍵である。たとえば、主に東北の 3 省と内モンゴル自治区に分布しているモンゴル、満、ダフル（達斡爾）、エヴェンキ（鄂温克）、オロチョン（鄂倫春）、ホジェン（赫哲）、シボ（錫伯）などの七つの民族は、漢族との通婚以外に、その民族間の通婚が主にこれらの民族の間で生じている。その主要な集中的居住区がチベット、四川、青海、甘肅などのチベット族の集中地区と相隣接しているチャン（羌）、メンバ（門巴）、ロツパ（珞巴）、トゥチャ（土家）、ユーグ（裕固）などの民族はチベット族との通婚が比較的多い。主に貴州省に分布している苗、プイ（布依）、トン（侗）、スイ（水）、コーラオ（仡佬）、トゥチャ（土家）などの六つの民族間の通婚率は比較的高い。主に広西チワン自治区に分布しているチワン（壮）、ヤオ（瑶）、ムーラオ（仡佬）、マオナン（毛南）、ジン（京）などの五つの民族間の通婚率も比較的高い。

第 3 に、宗教信仰は民族間通婚の拡大を妨げる働きをしており、この特徴は主に西北地区に集まり住むイスラム教を信仰する民族のなかに顕著にあらわれている。たとえばウイグル（維吾爾）、カザフ（哈薩克）、キルギス（柯爾克孜）、トンシャン（東郷）、回などの民族である。これらの民族の多数は族内婚を主としており、民族間の通婚は比較的小なく、そのうえ民族間の通婚の対象も主に同一の信仰をもつ民族である（李曉霞，2004）。

歴史上からみると、漢族とその他の少数民族の広範な通婚は漢族の人口が絶えず拡大する重要な要因であった。それでは、現在の漢族とその他の少数民族の広範な通婚は少数民族の人口に対してどんな影響をもたらすのか。2000 年の国勢調査のデータによれば、中国政府が少数民族の教育、就業、登用、徴税、出産政策などの面での一連の優遇政策を実行しているために、父母がそれぞれ漢族と少数民族であるゼロ歳から 9 歳のこどもの人口のなかで、少数民族の身分を選択するものは全体の 67.4% に達することを示している。明らかに、少数民族と漢族の通婚は少数民族の人口の増加を促進している。しかし、民族間通婚によって生まれたこどもの民族身分の選択について、両親のどちらが少数民族であるかが大いに影響している。父親が少数民族であるばあい、その子女が少数民族を選択する割合は 91.1% に達しているが、母親が少数民族であるばあいは、この割合は 51.3% に過ぎない。これは子女の民族身分を確定する時、父親は母親より影響力があることを物語っている（郭志剛，李睿，2008）。

同時に、中国政府は人口の比較的小ない民族の発展を非常に重視し、少数民族と少数民族の地区に対して特別優遇政策を実施する際、人口のより小ない民族に対してさらに多くの支持と便宜を与えている。したがって、少数民族と少数民族が結婚するばあい、その子女は民族の身分を申告する時、両親の所属する民族のなかで人口のより小ない方を選ぶ傾向がある。これは人口の比較的小ない民族の人口の増加をもたらしている（魯剛，2005）。

〔参考文献〕

- 陈顾远《中国古代婚姻史》，商务印书馆，1925年。
- 李景汉《北京郊外之乡村家庭》，商务印书馆，1927年。
- 陈东原《中国妇女生活史》，商务印书馆，1928年。
- 吕思勉《中国宗族制度小史》，中山书局，1929年。
- 李景汉《五百一十五农村家庭之研究》，燕京大学社会学系印刷，1931年。
- 徐启中《广州工人家庭之研究》，中山大学经济调查处印刷，1934年。
- 陶希圣《婚姻与家族》，商务印书馆，1934年。
- 高达观《中国家族社会之演变》，正中书局，1934年。
- 言心哲《农村家庭调查》，商务印书馆，1935年。
- 陈长衡《我国土地与人口问题之初步比较研究及国民经济建设之政策商榷》，《地理学报》，1935年第2卷第4期。
- 陈顾远《中国婚姻史》，商务印书馆，1937年。
- 孙本文《现代中国家族问题》，商务印书馆，1942年。
- 费孝通《生育制度》，商务印书馆，1947年。
- 瞿同祖《中国法律与中国社会》，商务印书馆，1947年。
- 潘光旦《明清两代嘉兴的旺族》，商务印书馆，1947年。
- 张政娘撰《古代中国的十进制氏族组织》，《历史教学》2卷3,4,6期，1951年。
- 杨宽《试论西周春秋间的宗法制度和贵族组织》，《古史新探》，中华书局，1956。
- 金景芳《论宗法制度》，《东北人民大学学报》，1956年第2期。
- 马起《婚姻和家庭在历史上的演变》，《东北人民大学学报》，1956年第6期。
- 丁山《甲骨文所见氏族及其制度》，科学出版社，1956年。
- 贺昌群《关于宗族，部族的商榷》，《历史研究》，1956年第11期。
- 童书业《论宗法制与封建制的关系》，《历史研究》，1957年第8期。
- 李学勤《论殷代亲族制度》，《文史哲》，1957年第11期。
- 姚薇元《北朝胡婚考》，科学出版社，1958年。
- 傅衣凌《论乡族势力对于中国封建社会经济的干涉》，《厦门大学学报》，1961年第3期。
- 左云鹏《祠堂，族长，族权的形成及其作用试说》，《历史研究》，1964年第5-6期。
- 杨宽《试论西周春秋间宗法制度和贵族组织》，《古史新探》，中华书局，1965年。
- 梁方仲《中国历代户口，田地，田赋统计》，上海人民出版社，1980年。
- 费孝通《家庭结构变动中的老年赡养问题》，《北京大学学报（哲学社会科学版）》，1983年第3期。
- 严汝嫔主编《中国少数民族婚姻家庭》，中国妇女出版社，1986年。
- 史凤仪《中国古代婚姻与家庭》，湖南人民出版社，1987年。
- 朱勇《清代宗族法研究》，湖南教育出版社，1987年。
- 刘英，薛素珍主编《中国婚姻家庭研究》，社会科学文献出版社，1987年。
- 费孝通《费孝通民族研究文集》，民族出版社，1988年。
- 彭卫《汉代婚姻形态》，三秦出版社，1988年。
- 高世瑜《唐代妇女》，三秦出版社，1988年。
- 张邦炜《宋代婚姻与社会》，四川人民出版社，1989年。
- 王玉波《中国家长制家庭制度史》，天津社会科学院出版社，1989年。
- 陈鹏《中国婚姻史稿》，中华书局，1990年。
- 张树栋，李秀领《中国婚姻家庭的嬗变》，浙江人民出版社，1990年。
- 岳庆平《中国的家与国》，吉林文史出版社，1990年。
- 朱凤瀚《商周家族形态研究》，天津古籍出版社，1990年8月。

- 谢维扬《周代家庭形态》，中国社会科学出版社，1990年版。
- 王玉波《中国家庭的起源与演变》，河北科学技术出版社，1992年。
- 徐扬杰《中国家族制度史》，人民出版社，1992年。
- 王玉波《启动·中断·复兴——中国家庭，家族史研究述评》，《历史研究》，1993年第2期。
- 张萍主编《当今中国社会病》，北京燕山出版社，1993年。
- 钱杭《中国宗族制度新探》，（香港）中华书局，1994年。
- 冯尔康等《中国宗族社会》，浙江人民出版社，1994年。
- 陶毅等《中国婚姻家庭制度史》，东方出版社，1994年。
- 沙吉才主编《当代中国妇女家庭地位研究》，天津人民出版社，1995年。
- 张萍主编《中国妇女的现状》，红旗出版社，1995年。
- 中国藏学研究中心社会经济研究所《西藏家庭四十年变迁》，中国藏学出版社，1996年。
- 岳庆平《汉代的家庭与家族》，大象出版社，1997年。
- 杨际平等《五～十世纪敦煌的家庭与家族关系》，岳麓书社，1997年。
- 常建华《宗族志》，上海人民出版社，1998年。
- 费成康《中国的家法族规》，上海社会科学院出版社，1998年。
- 郝时远主编《田野调查实录》，社会科学文献出版社，1999年。
- 祝瑞开《中国婚姻家庭史》，学林出版社，1999年。
- 段塔丽《唐代妇女地位研究》，人民出版社，2000年。
- 王善军《宋代宗族与宗族制度研究》，河北教育出版社，2000年。
- 郭松义《伦理与生活——清代的婚姻生活》，商务印书馆，2000年。
- 王跃生《十八世纪中国婚姻家庭》，法律出版社，2000年。
- 王玢玲《中国婚姻史》，上海人民出版社，2001年。
- 张敏杰《中国的婚姻家庭问题研究：一个世纪的回顾》，《社会科学研究》，2001年第3期。
- 邢铁《二十世纪国内中国家庭史研究述评》，《中国史研究动态》，2003年第4期。
- 王跃生《清代中期婚姻冲突透析》，社会科学文献出版社，2003年。
- 张翼《中国阶层内婚制的延续》，《中国人口科学》，2003年第4期。
- 蒋文迪《“中国历代农民家庭规模与农民家庭经济学术研讨会”综述》，《中国经济史研究》，2003年第4期。
- 张希坡《中国婚姻立法史》，人民出版社，2004年。
- 崔明德《先秦政治婚姻史》，山东大学出版社，2004年。
- 李晓霞《中国各民族间族际婚姻的现状分析》，《人口研究》，2004年第3期。
- 常建华《明代宗族研究》，上海人民出版社，2005年。
- 王晓清《元代社会婚姻形态》，武汉出版社，2005年。
- 鲁刚《现阶段我国少数民族人口发展的回顾与展望》，《云南社会科学》，2005年第4期。
- 胡鸿保主编《中国人类学史》，中国人民大学出版社，2006年。
- 阎云翔《私人生活的变革：一个中国村庄里的爱情，家庭与私密关系1949-1999》，上海书店出版社，2006年。
- 张国刚主编《中国家庭史》（五卷本），广东人民出版社，2007年。
- 苏红《多维视角下的中国家庭婚姻研究：结构，关系，家族和文化》，《社会》，2007年第2期。
- 郭志刚，李睿《从人口普查数据看族际通婚夫妇的婚龄，生育数及其子女的民族选择》，《社会学研究》，2008年第5期。
- 冯尔康等《中国宗族史》，上海人民出版社，2009年。
- 郑振满《明清福建家族组织与社会变迁》，中国人民大学出版社，2009年。
- 袁金霞《我国农村空巢老人养老问题思考》，《青海社会科学》，2009年第3期。

王永平《东晋南朝家族文化史论丛》，江苏广陵书社有限公司，2010年。

王英侠，徐晓军《择偶标准变迁与阶层的封闭性》，《青年探索》，2011年第1期。

李银河《家庭结构与家庭关系的变迁——基于兰州的调查分析》，《甘肃社会科学》，2011年第1期。

徐杨杰《中国家族制度史》，武汉大学出版社，2012年。

风笑天《城市青年择偶方式：未婚到已婚的变化及相关因素分析》，《江苏行政学院学报》，2012年第2期。

吴帆，李建民《家庭发展能力建设的政策路径分析》，《人口研究》，2012年第4期。王跃生《中国城乡家庭结构变动分析》，《中国社会科学》，2013年第12期。

石金群《中国当前家庭养老的困境与出路》，《中央民族大学学报（哲学社会科学版）》，2013年第4期。

〔訳者注〕

- (1) この著書の加筆前の全5章は、すべて訳者によって本学の『社会学部論集』に次のように完訳されている。

1章、「中国社会史と社会学史（2）－清代末期の維新と社会学－」，第44号，2007年03月。2章，「中国社会史と社会学史－辛亥革命から五・四運動の前まで－」，第43号，2006年9月。3章－1，「『五・四運動』後の30年（上）」，第47号，2008年9月。3章－2，「『五・四運動』後の30年（下）」，第49号，2009年9月。4章－1，「中華人民共和国成立後の30年（上）」，第51号，2010年9月。4章－2，「中華人民共和国成立後の30年（下）」，第52号，2011年3月。5章，「中国における近代化の新時代」，第53号，2011年9月。なお，この著書のなかの社会学自体の発展段階をもっぱら論述している箇所は「中国社会学百年略史－1892年から1992年まで－」（第45号，2007年9月）に記載した。

- (2) この教学大綱は，韓明謨著，星明訳，2005年，中国社会学史，行路社，pp.38-42を参照されたし。なお，原典は，『康南海伝』（梁啓超，1908年，上海広智書局）である。この「群学」が，H. スペンサーの *The study of sociology* を『群学肆言』（嚴復，1903年，上海文明編訳書局）として訳した「群学」と同一のものであるという確証はない。というのも，梁啓超がその師康有為のいう群学は天下を治める道，つまり康が語った「群をもって体となす，変をもって用となす，この二つのことを両立させれば，千年万年の天下といえども治めることができる」とうことばは，群（人びとのこと－星）をバラバラにさせたり，解体させたりしないための群術であり，これが群学であるといっているからである（韓明謨著，星明訳，2005年，同上，p.41）。また，韓明謨も「・・・かれら（康有為と梁啓超－星）が講じた『群学』は，つまり『群術』であり，いかにして人民大衆を一致団結させ，協力して外国からの侮辱を防ぐかという道理である」と述べている（韓明謨著，星明訳，同上，p.42）。

- (3) 塚本哲三，1925，禮記，有朋堂書店，p.662。ただし，表記のみ現代仮名遣いになおした。

〔付記〕

この翻訳にあたっては著者張琢教授（中国社会科学院）から直接承諾をいただいたうえに，訳者の多くの質問に答えていただいた。記して感謝する次第である。

（ほし あきら 現代社会学科）

2016年3月18日受理